

タイ研究拠点設立体験記 -COE海外拠点開設への道-

Report on the Establishment of Kyoto University 21COE Thai-Research Station on Sustainable Energy System

鈴木 義和
Yoshikazu SUZUKI

京都大学 エネルギー理工学研究所 助手

問合せ/スズキ ヨシカズ 〒611-0011 京都府宇治市五ヶ庄 TEL 0774-38-3506 FAX 0774-38-3508 E-mail/suzuki@iae.kyoto-u.ac.jp

キーワード：21COE プログラム，海外研究拠点，インフラ整備，NSTDA，ラジャマンガラ工科大学

1 はじめに

平成 14 年度から文部科学省の 21 世紀 COE プログラムが開始され，14 年度には 113 件，15 年度には 133 件の提案が採択された¹⁾．このプログラムの主旨は，「我が国の大学に世界最高水準の研究教育拠点を学問分野毎に形成し，研究水準の向上と世界をリードする創造的な人材育成を図るため，重点的な支援を行い，もって，国際競争力のある個性輝く大学づくりを推進することを目的とする」とされている．TOP30 構想として多くのメディアにも取り上げられたのでご存知の方も多いのではないだろうか．

さて，筆者が平成 15 年 5 月から勤務している京都大学エネルギー理工学研究所では，14 年度から「環境調和型エネルギーの研究教育拠点形成」事業が開始されており²⁾，その一環として 15 年 11 月にタイ国内に研究拠点を開設する運びとなった．このような海外拠点形成の動きは他の COE 事業等でも行われつつあり，今後ますます活性化していくものと考えられる．海外拠点開設に当たっては，日本国内で事務所を開く以上に入念な下調べ^aと準備が必要となり，多くの方々の協力が不可欠となる．

^a例えば，本誌に和田先生が連載されている「タイ便り」は非常に参考になった

本稿では，筆者がタイ拠点開設事務局の一員（つまりは裏方）として拠点開設に向けての実質的な準備をスタートさせた平成 15 年 7 月下旬から 11 月 21 日の開所式に漕ぎ着けるまでの過程を紹介したい．また，拠点開設に至る道のりで知り得た，タイにおける国際共同研究の現状の一端を併せて紹介する．本稿が，これから海外拠点開設に関わられる方々，特に，「実働部隊」となる若手の方々のご参考になれば幸いである．

2 タイ拠点設立への道

2.1 開設に向けたスケジュール

タイ研究拠点は，オフィスとラボがそれぞれ設立されることになっており，オフィスについては，様々な機関との情報交換などを考慮してバンコク市内中心部に，また，実験を行うラボについては，ラジャマンガラ工科大学（RIT：35 キャンパス，学生数 93,768 人の有力大学）メインキャンパス内に開設することが決まっていた．また，開所式は 11 月 20～21 日の間に行うことになっており，8 月中にはオフィスの物件を確定するというスケジュールになっていた^b．実質的な準備がスター

^b「なぜタイなのか？」という根本的な疑問があるかもしれないが，東南アジアの中心に位置し，持続可能エネルギーの実証研究に適してい

表 1 タイ拠点開設への過程と関連した出来事（平成 15 年）

日程	著者・事務局	京大 COE 教授陣	タイ側（NSTDA, RIT 等）
7 月中旬 7 月下旬 8 月 4 日 8 月上旬	事務局立ち上げ 文部科学省科学技術・学術政策局 レク タイ訪問準備（スケジュール確定 、タイ側との調整、訪問者関連資 料の準備）	開所式スケジュールの確定	京大訪問受入準備
8 月 12-16 日	タイ訪問：RIT でのシンポジウム参加、京大東南アジア研・京大情報 COE タイオフィスへの訪問、 チュラロンコン大学、マヒドン大学、タイサイエンスパークの訪問、オフィス物件下見など		
9 月 10 月 7-9 日 10 月上旬・中旬 10 月 14 日 10 月 22 日 10 月 27-31 日 11 月上旬 11 月 18 日	11 月の開所に向けた準備開始 開所シンポジウムサーキュラー準 備 印刷所へサーキュラー原稿を入稿 開所シンポジウム・開所式用物品 買出しと発送 筆者タイへ到着、現地でシンポジ ウム等の準備開始	バンコクオフィス物件契約 吉川（暹）教授、文科省科学技 術ミッションで再度タイ訪問 手塚教授タイへ到着、オフィス 整備	RIT ソンマイ先生によるオフィ ス物件契約準備 RIT ラボ開設準備 タイ国大使、京大訪問 ↑ RIT ソンマイ先生らによるシン ポジウム、連携ラボ等の準備 ↓
11 月 19 日 11 月 20 日 11 月 21 日	京大 COE 訪問団、タイ到着 NSTDA サイエンスパークにて、開所シンポジウム 午前 RIT にて、連携ラボの開所式；午後、バンコク市内にてオフィス開所式		

トしたのは 7 月下旬であり、4 ヶ月間でバタバタと準備したことになる（表 1）。

2.2 文部科学省科学技術・学術政策局レク

COE 事業でのタイ拠点開設とは直接的に関係しているわけではないが^c、具体的な準備作業を開始しはじめた頃、文部科学省科学技術・学術政策局に、京大 COE のこれまでのタイとの交流と今後の連携について説明しに伺うことになった。これは、今回のタイ拠点開設の責任者である吉川 暹 教授（筆者の現上司）が 10 月 27 日～31 日にかけてタイへ科学技術ミッション団として派遣されることに伴い、その事前打ち合わせが必要とのことでセットされたものである。吉川教授は都合がつかず、筆者の方でレク資料を準備して霞が関に向った^d。ちょうどこの時期は、原発トラブルによる東京近郊での

るということと理解できると思われる。

^c 文部科学省内の COE 担当部局は日文部省系の高等教育局、科学技術ミッション担当部局は日科技庁系の科学技術・学術政策局であり、科学技術・学術政策局は別館（日本郵政公社）にある。

^d アポ待ちの間、隣の日土地ビルの本屋で時間つぶしをしていたところ、つい数ヶ月前までの上司（経済省 谷ナノテク・材料室長、現参事官）にばったり出会い、「まあ大変だろうけど、とにかく頑張って」と励まされた。

電力不足が懸念されていたときであり、節電のために 1 階の郵政公社ショールーム以外はほとんど冷房が効いていなかった。タイをも上回りそうな暑さの中で皆さんが仕事されていたのが印象に残っている。

さて、角田国際交流推進官、佐藤国際研究専門官、加藤科学技術・学術行政調査員の 3 名の方々と 1 時間弱程度お話しし、その際に、文科省から JICA の政策アドバイザーとしてタイの国家科学技術開発庁（National Science and Technology Development Agency, NSTDA：ナスダと発音）に派遣されている渡辺泰司さんを御紹介いただいた。渡辺さんは、今回のタイ拠点開設に関わるキーパーソンであり、その後数回に及ぶ NSTDA 訪問のスケジュール調整や在タイ日本大使館とのセレモニー出席の調整など、多方面で大変お世話になった。

2.3 どこにオフィスを開くのか？ 8 月のタイ訪問

8 月 12 日～16 日にかけて、京大エネルギー科学研究科の伊藤教授、手塚教授及び前述の吉川暹教授とともに、実際にタイへ訪問することとなった。この訪問で

◎解説

は、ラジャマンガラ工科大学 (RIT) でのシンポジウム参加に加え (図 1), すでにバンコク市内にオフィスを構えている京大東南アジア研と京大情報学研究科 COE タイオフィスへの訪問を行い、数多くの現地情報を得ることができた。



図 1 ラジャマンガラ工科大学 (RIT) での Numyoot (ナムユット) 学長の講演風景。

また、阪大とすでにバイオ関連の連携ラボを開設しているマヒドン大学や、チュラロンコン大学³⁾、東工大がオフィスを構えているタイの代表的研究機関である NSTDA サイエンスパークなどを見学し色々とお話を聞くことができた。

バンコク市内のオフィス開設に当たって、特に参考となったのが現地で滞在されていた荒井修亮先生からの情報⁶⁾であり、以下のポイントを教えていただいた (図 2)。

- ・スクンビット通りには日本の事務所が多い。例えば、情報 COE のオフィスが入っているコンドミニアムの入居者の 9 割は日本人。治安は良い。
- ・スクンビット通りの家賃の相場 (セキュリティを含めたコスト意識が必要。コンドミニウム専属マネージャーの有無を確認する必要あり)
- ・バンコクでの不動産契約形態 (1 年更新や事前の退去通知など)
- ・公共料金の支払方法。就労ビザをもたない外国人は、原則タイ国内で口座を開設できないとのこと。家賃や電気代については、現金手渡し、ある

⁶⁾さすが、情報学研究科。荒井先生は現在、海ガメの生態を研究されている。海ガメ用センサーも見せていただいた。



図 2 荒井先生へのタイ拠点設営に向けたインタビュー。左から RIT のソンマイ先生、吉川先生、伊藤先生、手塚先生、メモ取り中の筆者 (鈴木)、荒井先生。

いは、日本からの送金を行う必要がある。

- ・インターネット、特に ADSL のインフラは現時点では不十分 (開設できるが、結構高価で速度はあまり出ない)
- ・携帯電話は、タイでの生活では必要不可欠。基本的にワーキングビザや口座がないと契約が難しいので、プリペイド携帯がおすすめ

今回のタイ拠点準備全般に渡って何から何まで色々とお世話いただいたのが、RIT のソンマイ先生^{f)}である。バンコク市内数ヵ所をソンマイ先生と共に見て回り、結果的にスクンビット通り付近 (Windsor Suites Hotel の向かい) に良いオフィス物件を見つけることができた。8 月のこの訪問では、海外での不動産契約といった手続きには、やはり現地事情を良く知った方の助言が不可欠であるということを実感した。

2.4 海外拠点における研究協力はどうかあるべきか？

前項で少し触れたが、8 月のタイ訪問では、吉田敏臣日本学術振興会 (JSPS) バンコク研究連携センター長 (大阪大学名誉教授) のご案内により Mahidol University-Osaka University Collaborative Research Center for Bioscience and Biotechnology を

^{f)}まったくの偶然だが、ソンマイ先生は阪大の化学系にドクターを取るために留学されており、筆者の同級生だった (厳密には専攻が異なるが姉妹専攻)。メールをやり取りしている段階では互いに気づかなかったが、意外なところに縁があるものだ。

見学させていただくことができた。阪大とマヒドン大学は文科省の COE プログラムがはじまる以前から、実質的な連携ラボを運営されている。海外拠点における研究協力が実現した流れとして、

- ・ JSPS 拠点大学プログラムにより、1978 年にタイと二国間連携、その後、多国間の拠点大学形成が進む。
- ・ 1995 年には、阪大にて International Center for Biotechnology を設置。
- ・ 阪大は、Sister University 制度によりマヒドン大学と連携
- ・ 現在は、連携プログラムの一環として、東南アジア各国から、3 週間の滞在研修を受け入れ。
- ・ また、現在、JSPS の短期派遣制度（1ヶ月間）を用いて、日本の研究者が連携センターで共同研究を実施。

という形で共同研究が進んだとのことである。海外研究拠点で実際に共同研究を行うには色々な装置が不可欠であるが、阪大の場合は装置と人の面でコミットし、総経費で装置（の一部）を確保したとのことである。一般に、大学では企業と違いトップダウン的に物事を進めるのが難しい中で、大変参考になる事例といえるだろう。また、吉田センター長によれば、二国間の研究協力が成立するためには、

- ・ ターゲットエリアがしっかりしていること。
- ・ 双方にメリットがあること（バイオ分野は日・タイ双方にとってメリットがあった）
- ・ 個人個人の協力では限界がある

という 3 点について考慮する必要があるとのことだった。実際に活動が進んでいる国際連携プロジェクトを目の前にすると、この言葉のもつ深い意味を多少なりとも理解できたような気がする。

2.5 オフィス開設にあたっての準備 開所 2ヶ月～1ヶ月前にかけて

8 月中旬のタイ訪問でなんとかオフィスの目途がつき、9 月には事務局の作業は少し落ち着いたが^g、11 月のタイ拠点開設に併せたシンポジウム及びセレモニー

^g9 月は秋の国内学会シーズンであり、本業（研究・教育）優先という状況の中で作業が滞っていたのが実情である。

（開所式）の準備を着実に進めなくてはならない状況にあることには変わりなかった。しかし、9 月下旬から 10 月上旬の時点では 11 月の開所シンポへの京大側参加メンバーがいまだ固まっておらず、また、タイ側の誰に出席・スピーチを依頼するのかということも固まっていなかった。事務局内では、案内サーキュラーを遅くとも 10 月 20 日頃には発送しなければならない、というコンセンサスはあったものの、メンバーが決まらないことには動けないという状態が続いた。

こうした中、10 月上旬には、事務方（経理課）の担当者も含めたタイ訪問が行われ、バンコクオフィス賃借契約が行われた。この 10 月訪問には筆者は同行しなかったが、オフィスに必要な物品の現地買出しがおこなわれ、内装改修中のオフィスへの荷物搬入等が行われている。

この第 2 回タイ訪問メンバーの帰国直後の 10 月 10 日、タイ国在日大使が 10 月 14 日に京大を訪問するという話が急に持ち上がり、上層部から「この機会にタイ拠点開設の説明を行う必要がある、とにかく資料と配布可能なサーキュラーが必要」との指示が飛んだ。13 日は停電で E-メール等の連絡手段もストップするため、「もう少し早く分かっていたら...」と思ったが後の祭りである。泣き言を言っても仕方ないので、内容には未確定部分を残しながらも、とにかく A4・7 ページもののサーキュラーを作ることになった。

表 2 に、11 月 20 日、21 日の開所シンポジウム及び開所式の大枠スケジュールを示す。

一瞥した限りでは、通常のシンポジウムやシンポジウムと大して変わりはないが、慣れない土地でセレモニーとバンケットを除いて全て別々の場所で行う（しかも、パトムタニーとバンコクは車で 1 時間の距離があり、バンコク市内の渋滞の影響などを考慮する必要がある）というかなり厳しいものである^h。会場が分散する分、事前の準備の量も増え、ご協力いただいたタイ側の方々には大変なご迷惑をお掛けすることになってしまった。

さて、10 月 14 日用の暫定版サーキュラーは何とか間に合ったものの、印刷して関係者に配布するためには、会場やスケジュール、問合せ先や登録方法を含めた詳細な内容が必要となる。表 1 にあるように、タイ拠点開設責任者の吉川（暹）教授が科学技術ミッションで 10 月

^h 日程にあと 1 日余裕があれば多少は楽だったのかもしれないが、関係者のスケジュールを押えることが難しく、また、COE プログラム助成金の原資が税金であることを考えると、無駄に長引かせてはいけないうえという考えがあった。

表 2 タイ拠点開所シンポジウム及び開所式の大枠スケジュール

November 20	
10:00-12:00	Thailand Science Park Visit Tour (Pathumthani)
13:30-17:00	21COE Thai-Research Station Opening Symposium (at Thailand Science Park, NSTDA)
19:00-21:00	Welcome reception
November 21	
10:00-12:00	Opening Ceremony of the 21COE Thai-Research Station Collaborative Research Laboratory at RIT (Main campus, Pathumthani)
15:00-17:00	Opening Ceremony of the 21COE Thai-Research Station Bangkok Office (Amarin room on 32nd floor of Windsor Suites Hotel, Bangkok)
18:30-	Banquet (at Windsor Suites Hotel)

27 日からタイに再び渡航することになっており、それに間に合わせるためには 10 月 22 日朝イチには印刷所に原稿を入稿する必要があるということが分かった。この締切に間に合わせるために事務局メンバーを中心にプログラム調整作業が続いたが、一応印刷して配布しても恥ずかしくない程度の内容が固まったのが 21 日の 17:00 頃であり、印刷用原稿の準備作業には正味半日も残されていなかった。このときの作業は、実際かなりきつかったことを覚えているⁱ。研究室秘書の瀧下さんによるベクトルデータの細かい修正や印刷業者の方のご尽力の甲斐もあって、なんと翌日には印刷物が届けられるという嬉しい誤算もあった^j。この突貫作業の結果は多少のミスプリントも生んでしまったが、完全にチェックすることを目指して原稿を準備していたのでは、「配布したくても配るものがない」、という状況に陥りかねなかった^k。

ⁱ これまでの準備資料は、関係者のチェックをすることから、MS-Word ベースで行われており、入稿に際しては、A3 裏表(折りたたんで A4)に収まるようにデザインを考えながら Illustrator のデータを作るという作業が必要となった。29 時頃にはなんとか原稿ができたが、22 日の朝イチからは、独法化準備に向けた 3 日間の衛生管理者研修が筆者を待っていた。科研費申請の学内締め切りも重なり、かなり危ない綱渡りの状況だった。

^j 印刷業者でも若干マージンを見込んでおられたはずだが、“たまたま”印刷機が空いていたそうで幸運だった。しかし、この納期が当たり前と思って、さらにぎりぎりまで原稿が集まらないという事態は避けたいものだ。

^k 結局、印刷物の上からテプラを貼って修正するという追加作業が発生してしまい、瀧下さんらの手を煩わせてしまうことになってしまったが、やむを得なかったと思っている。

2.6 タイ拠点開設事務局メンバーの増強 開所イベント直前準備

開所までの日程が 1 ヶ月を切る中、11 月には宇治キャンパス COE 事務局の吉田さんにもタイ拠点開設事務局に加わっていただき、必要な物品の国内での購入やタイへの発送など、3 週間後に迫った開所式に向けての準備が進んだ。吉田さんの加入で大きく進んだのが、国際ローミングが可能な国内・海外共用携帯電話の導入である。表 2 に示したとおり、20・21 日の開所イベントは移動が多く、また、前述の荒井先生のコメントにもあったように、タイ国内での連絡が可能な携帯電話は欠かせない。発売直後の V 社の端末¹を文字通り走り回って探して頂き、法人契約では通常数日間かかるところをなんとか 1 日で契約に漕ぎつけ、タイオフィス先発メンバーで 14 日にタイ入りする手塚教授に無事手渡してもらうことができた^m。この携帯のおかげで、現地の生の情報を迅速に得ることができ、また、開所シンポジウム当日でも大いに役立った。

また、現地では様々な支払が必要となるため、教官個人レベルの立替払いではかなり厳しい案件もあり、経理サイドの協力が不可欠となっていた。幸い、開所シンポジウムに事務・経理サイドからも参加いただけることになっていたため、幾分難航しながらも、なんとか事前に支払方法等の調整を行うことが可能となった。

この他、Web サイトでの情報発信や⁴⁾、シンポジウム講演の段取り等の様々なイベントの準備が続き、事務局はもう少しでパンク寸前に陥るところだったが、何

¹ 出回り始めたばかりで、京都近郊には在庫がほとんどなかったそうである。

^m 筆者もまだまだ若手(のハズ)なのだが、「若い女性のセンスと行動力は違う。仕事も速い」と実感した。

とか手はずも整い、開所イベントに最低限必要なものに+αして、クオリティを高める方向への準備が進んだ。筆者のところでは、当日配布用アブストラクトの編集といった定番の作業に加え、Illustratorによるオフィス・ラボ用の表紙デザイン、京大側参加者向けの詳細スケジュール（旅のしおり？）の執筆などなどをぎりぎりまで担当した。また、筆者が言い出したテープカットセレモニーについては、「面白いからやってみよう」というものから、「タイでの風習は違うのではないか？」等の賛否両論があったが、研究室在籍のタイ人留学生に確認してみたところ特に問題無しと分かり、紅白テープ1式、儀礼用鋏と手袋4人分^aを準備し、タイへ送ることとなった。

3 いよいよ本番：タイ拠点開所シンポジウム及び開所式

3.1 現地での最終準備

筆者は京大訪問団が到着する1日前（11月18日）にタイ入りし、すでに現地入りしていた手塚教授と合流し、オフィスの準備をすすめることとなった。19日の午前にはNSTDAの渡辺さんが窓口になって下さり、開所シンポジウム及び開所式へのタイ側VIPの参加状況の確認やプレス対応（読売新聞、日本経済新聞等）、在タイ日本大使館への連絡などが進化した。また、19日には、移動事務局用として、タイ国内通話用の携帯電話の入手にも奔走した。ICカード式のプリペイド端末をスクンビット通り沿いのEMPORIUMという大型デパートにて入手することができ、日本で用意してきたv社の国際端末とともに大変役立った。

3.2 公式イベント

公式イベントはいざ動きだすと、後は何とかなるものである。11月20日、パトムタニーにあるNSTDAサイエンスパークで午前中に見学会が開催され（図3）、また、午後からは開所シンポジウムが開催されている^o。

^a4では縁起は大丈夫かなどと悩んだが、結局タイ側・日本側2人ずつにカットして頂くということに落ち着いた。

^o筆者は8月にサイエンスパークに訪問していることもあり、バンコク市内のオフィスに留まって翌日の開所式の準備を進めつつ、京大側説明用のOHP作成作業を行うことになった。真っ先にオフィスをオフィスとして使った瞬間だったかも知れない。



図3 サイエンスパークの見学風景

また、夜に開かれたレセプションでは、NSTDA 渡辺さんのおかげで読売新聞記者と吉川暹教授での間のインタビューが実現し、22日土曜日朝刊の紙面にタイ拠点のニュースが掲載される運びとなった⁵⁾。

21日午前には、RITにて連携ラボの開所式（図4、図5）が開催され、午後にはバンコク市内のWindsor Suites Hotelでの開所式、そしてその向いにあるバンコクオフィス（図6）の見学会が開催された。



図4 RIT内の連携ラボ外観（ラボにはこの建物内の2室を使用）

筆者らは先にバンコクオフィスに引き返し、RITでのシンポジウム参加組との連絡をとりつつ、開所式参加のために移動中のNSTDAパイラート長官や日本大使館小津書記官に直接電話し、ご挨拶戴く際の挨拶順等の調整をぎりぎりまで行う必要があった。かなり気をもん



図 5 RIT 連携ラボの開所式



図 6 バンコクオフィス外観（オフィスにはこの建物内の 1 室を使用）

だ数時間である。

また、これと同時にオフィス見学者用の大量のスリッパの準備やオフィスの掃除、ホテル開所式会場準備やテープカットセレモニーの飾りつけなどに走り回った。裏方とはこんなものである。21 日夕方には無事、新オフィスでのテープカットも行われ、事務局の一員として、ほっと胸をなでおろす瞬間となった。同日夜にはバンケットが開催され、全公式日程が終了した。

4 反省点と今後の課題

さて、「やっと終わった、良かった、良かった」と喜んでいだけでは進歩はないので、今回の反省点と今後の課題について考えてみたいと思う。

今回、日程がかなりタイトな中でなんとか「拠点形成」という形は出来上がったのだが、これによって RIT のソンマイ先生、NSTDA の渡辺さんをはじめ、多数の方に過剰なご負担を掛けてしまったことがまず反省点として挙げられる。限られた準備期間の中で京大側の方針が決定するまでに時間がかかり、また方針の変更がたびたびあった結果、タイ側に多大な迷惑をかけるという状況になってしまった。大学内でいくつかの部局が集まって大掛かりなことをするのは簡単ではないという声があるのを承知の上で、

- ・意思決定・伝達プロセスの迅速化
- ・指揮系統・責任（担当）の所在・窓口の明確化（必ずしも一本化する必要はない）

を今後の課題として挙げておきたい。企業の方から見れば、「なにを今さら」という印象を持たれるかもしれないが、独法化を迎えようとしている大学に必要なのはこういった点だと思われる。コンセンサスをとること、細部を詰めることは勿論重要だが、それに固執するあまりに物事が進まないという事態は（特に相手方がある場合は）何とかして避けなければならない。状況に応じて 8 割の完成度で先に進み⁶⁾、必要に応じて見直しによって完成度を高め、結果として全体のクオリティを高めるという「俯瞰的リーダーシップ」が海外拠点開設といったプロジェクトには必要とされるはずである。

また、この種の事務局を今後担当される方へ、ノウハウとして以下の点を挙げておこうと思う。

⁶⁾ 筆者の場合は、役所出向中に直接の上司（事務官ではなく技官系の課長補佐）にこの種のノウハウを叩き込まれ、いまでも財産になってい

- ・ミーティングをするときは事前に何を決めるべきかの議題メモを容易しておく（簡単なもので良いが、これを怠ると、原則論・そもそも論等により議論が発散する）
- ・ミーティング中は必ず議事メモをとる（正式な議事録である必要はない）。メモには、今後誰が何を担当するのかを明記しておく。メモが残っていない会議は、やっていないとのあまり変わりなく、残るのは疲れと自己満足だけである。
- ・できるだけその日のうちに（遅くとも翌日には）参加者にメモ（案）を配布する。（間違いや思い違いが含まれている場合があるので、この時点では、参加者以外を含めた関係者全員に配る必要はない）。自分の担当する内容が名前付きでメモに書いてあると、責任が明確化されるので、その後の仕事が比較的スムーズに運ぶ。
- ・誰かがやってくれているはずという思い込みは甘い幻想。
- ・人にお願ひしなければできない仕事はできるだけ早く回すようにする。（遠慮して言い出すのが遅くなると、結局迷惑するのはお願ひされる側になる。）
- ・自分のところにとどめておく場合は、少なくとも多少はクオリティを上げる。（逆に言えば、丸投げしなければならないのであれば、状況を確認した上でできるだけ早く投げる）

インターネットや E-メールの発達に伴い、以前なら 1 年程度はかけて準備した海外国際シンポジウムなども、場合によって数ヶ月で準備ができるようになってきた。しかし、これによって、事務局サイドで見込めるはずの作業上のバッファも加速度的に減少し、人手不足も相まって色々なところに皺寄せが発生している。このような状況を克服するには、これからの研究者には、英語（タイ語も？）でのやり取りやプレゼン技術といったことに加え、製版やフォントの種類といった初歩の DTP の知識から、式典での礼儀作法・様式といった伝統的な知識まで、ありとあらゆる素養が必要となって来そうである⁹。

ると考えている。何事も経験だが、その分、失ったものも大きいとの噂も …。

⁹すでに研究者とは呼ばなくなっているかもしれないが …。

おわりに

今回の拠点開設を担当した上で、思い出されるのは、JSPS の吉田先生の「個人個人では限界がある」という言葉である。いろんな方々にご迷惑をおかけしながらも、チームとして動いてやっと一つのものが出来上がったという気がする。

今後、この海外研究拠点という場を「素晴らしい国際連携の場」とするか、それとも、「単に見た目の良い器」にしてしまうかが問われていくことになり、事務局としてではなく研究者の一人として身の引き締まる思いである。

謝辞

今回のタイ拠点開設に当たっては、ソンマイ先生をはじめ、ラチャダ先生、アナン先生らラジャマンガラ工科大学の多数の先生方、NSTDA の渡辺さんや JSPS の吉田先生、京大の荒井先生、柳澤先生などバンコク滞在の多くの方々にお世話になりました。事務局の一員として、この場を借りて厚く御礼を申し上げます。

また、事務局メンバーとして、一緒にバンコク市内を走り回ってくれた吉田さんと大学院生の園部君、ソラポン君、事務局と教授サイドとの意見調整を行って下さった大垣先生、また、色々とサポートしていただいた瀧下さんと経理課の方々に感謝致します。最後に、今回のタイ拠点設立に携わる機会を与えていただいた、吉川 暹教授に感謝致します。

【参考文献】

- 1) 日本学術振興会 21 世紀 COE プログラム
<http://www.jsps.go.jp/j-21coe/>
- 2) 京都大学 21 世紀 COE プログラム（大学院エネルギー科学研究科・エネルギー理工学研究所・宙空電波科学研究センター）
<http://energy.coe21.kyoto-u.ac.jp/>
- 3) 和田重孝,「タイ便り」, マテリアルインテグレーション, 2001 年 11 月号より連載
- 4) <http://energy.coe21.kyoto-u.ac.jp/thai.pdf>
- 5) 読売新聞,「京大グループがタイに研究拠点」, 2003 年 11 月 22 日（土）朝刊 2 面。
- 6) リクルートワークス研究所, 企業事例,
<http://www.works-i.com/article/db/aid100.html>